



この茅葺屋敷は、築三百年有余の家で、空き家となり老朽化していたものだが、額田町の鈴木啓允町長の想いに動かされ

「かやぶきの里」分科会について
 去る十一月十日、十一日の二日間愛知県において行われた地域づくり団体全国研修交流会愛知大会で、私が参加したのは岡崎市「かやぶきの里」分科会であった。旧額田町の山里、千万町（せまじょう）茅葺屋敷の田舎暮らしを体験するプログラムだった。のどかな田園風景の中、手作りこんにやく・五平餅作りなど体験、シシ鍋に舌鼓を打ち、短い時間ながら、山里の地域ならではの田舎暮らしが十分に堪能出来た。

生き返った茅葺屋敷
 この茅葺屋敷は、築三百年有余の家で、空き家となり老朽化していたものだが、額田町の鈴木啓允町長の想いに動かされ

た所有者が無償で町に貸与し、「じさんじょの会」を中心に、住民の協力のもと屋根の葺き替えなどを行い、都会と田舎のつなぐ施設として生き返った。

全国大会で人材を育てる
 このプログラムを主管した「じさんじょの会」の構成メンバーは、毎年

分科会の最後に鈴木氏は、「このような活動が無ければ額田町は、合併したのち岡崎市の東の果ての地でしかなかったでしょう。今、全国から、自分達の活動から学ぶためにこの地に人が来ています。どんな小さな地域の活動でも、地域を盛り上げようと動いていけば、市や県、国などの行政も情報をつかんで見に来てくれるのです。みなさんが地元に戻って本気に仕掛ける。チャレンジ精神を持っていただき、死ぬまで青春にすれば、そうすれば地域はつながる。」という言葉がとても印象的でした。

第二十四回地域づくり団体全国研修交流会
 愛知大会に参加して
 沖地ネット事務局長 親川善一

本気で仕掛ければ道は開ける
 各地で行われる「地域づくり団体全国大会」へ数年にわたり地域住民を参加させ、各地の色々な地域づくりのヒントや想いを地元へ持ち帰り、吸収していった。人材を育てる方法として全国大会を活用していったのだ。

「じさんじょの会」
 「じさんじょの会」は地元の住民が指導者になり、田植えや稲刈り、サツマイモ堀や餅つき大会など、年間のプログラムを作成し、田舎ならではの農業生活体験を都会へ発信し続けている。
 ぬかたいなか村千町茅葺屋敷のホームページ
<http://homepage2.nifty.com/zemanjo-kayabuki/>



たくさん集めてお金持ち?...キイロダカラ

きれいな貝殻で人気のタカラガイ類。生きている時は薄皮マントを被って岩陰に隠れています。このマントが貝殻の色と全く違ってとても派手！キイロダカラは虎縞模様。マントをそっと触ると、ちょっと引っ込んで、つるりとした貝殻が覗きます。古代中国でお金になり、「貝」という象形文字の元というこの貝、なかなか由緒正しいです。
 (文・写真：鹿谷麻夕)

海のつばやき：その5

屋比久功
 沖縄市福祉まつりで「ふくふく童話大賞」を立ち上げ、現在は第一次選考委員。島マス記念塾ディベート・コーディネーター。琉球大学生涯学習教育研究センターリカレント講座で「まちづくりの担い手：住民を育てる自治の権利」等について報告。沖縄市職員として沖縄こども未来ソリューションプロジェクトに携わる。沖縄こどもの国の現場に派遣されて4年目、同財団こども未来課長。

また、懸案である運営についても刷新し、新財団（沖縄市長が理事長を務める）を設立した上で、経営手法を取り入れるべく、専務理事（兼施設長）を全国公募した。選考の結果、民間で百戦錬磨の経験を持つ西川嘉伸氏が就任し、平成十四年度には十四万人を切るまでに落ち込んだ財団運営を立て直すという重責を担うことになる。

【復活：物語は続く】
 リニューアルオープンした平成十六年度に三十七万人を達成し、沖縄こどもの国（愛称）は復活する。しかし、前途は容易ではない。沖縄市及び沖縄県の運営支援により人材育成

という公的使命を果たしつつ、同時に自らの手でお金を稼がなければならぬ。集客現場は厳しく、サービスは待たないで、マネジメントは奥が深い。その現実の重さに耐えて使命実現に邁進する力の源泉は、県民のこどもの国への愛着である。この愛着に励まされてスタッフは士気を高めてきた。笑顔と歓声が飛び交う沖縄こどもの国はこれからも幾多の試練を乗り越え、夢と情熱が織り成す冒険物語を紡ぎだしていくことだろう。

シマおこしとは？

～シマおこし研修宿泊会へのお誘い～

オキチ事務局担当初年度の大きな企画事業『シマおこし研修宿泊会』がようやく形になりました。会員の皆様には、締め切りまで1ヶ月もない中で告知となりすみません。でも、今回はこれまでとは違う『本当の意味のシマおこしとは何なのか?』という原点を振り返る時間を過ごしてもらえ企画となっています。

おこす』でしょ。語りではなく、「シマをおこす」。つまり、開催地域や参加者の事例を持って帰るだけでなく、その開催地域が今よりもっと元気になるスパイスを落とすことが重要なテーマ。開催地域が元気になる『タネ』をみんなで蒔いていく研修会なのです。普段活動している私達の智恵が結集し、アイデアを出し合う。そして、開催地域が育ててきた智恵を参加者が吸収する。そういうことかなあと思っています（まだ自問自答中です）。

シマおこし研修宿泊会って何？から始まったこの企画、オキチの会員に会う度に、『ここにも、おっ、ここにも元気な人』というのが感想。そんな元気な人がとりあえず集まり、語る、そんな企画なんだと勝手に思い込みました。この研修会のテーマをモノと人をつなぐ、地域と協働する仕掛けをみつける、とし、この研修会が届けたいこととして、身近に落ちている資源があることに気づいてほしい、資源＝人でもある、いろんな活動の智恵が終結する中から自分達の活動のヒントになるモノを持ち帰ってほしい、次につながる人と出会いの場としてほしい、と考えました。そして、中部の団体の何人かに会い、調整をはじめました。そんな中、ある人に言われました、「シマおこし研修会はそのようなじゃない。言葉を読んでごらん。『シマを

そ の想いのもと、各島の人がコーディネーターとなり、シマの楽しみとシマの課題を挙げてもらっています。参加者はその課題が前進するようなアイデアを出して下さい。それを今後の元気につなげるように、受け入れた島の人や事務局ですこしずつ次へつながらる輪を大きくしていこうと思っています。これは単なるイベントではなく、次へつなげる宿泊研修会にしよう、各島担当のコーディネーターと話しています。今までと何か違う企画にぜひ、参加して下さい。
 (地域づくりコーディネーター 安次富日奈子)

編集後記

何とか年内に12月号を発行することができました。研修会やアドバイザー派遣等の報告を読んでみると、もっと紙面があったらと思うことがしばしばです。いつか、実現できますように、来年の初夢になるかな。異常気象的な冬ですが、皆さん健康に十分気をつけてよい年をお迎えください。
 (HU)

発行
 沖縄県地域づくりネットワーク
 〒902-0073 那覇市上間338番地
 TEL 098-836-2905 FAX 098-833-8552

なんぶ再発見！地域づくり研修交流会」 第3分科会ワークショップ 「その時歴史が動いた 八重瀬町編」 アドバイザー 天願 亮

一体感の醸成を目指して

南部広域圏市町村事務組合が主催し、八重瀬町・南城市・与那原町・南風原町が主管となって開催された地域間交流事業「なんぶ再発見！地域づくり研修交流会」は、南城市のホテルサンライズ知念を主会場とし、八重瀬町、南風原町及び南城市・与那原町合同の三分科会を設けて、それぞれがテーマを掲げ取り組んだ。全体では六十四名がプログラムに参加したなか、「八重瀬町が担当した第三分科会。地域資源の活用と展望を探る」には二十五名のご参加いただいた。

合併して間もない八重瀬町において地域振興や活性化に向け優先的に取り組むべきことは、行政のみならず、公共的団体や民間活動、住民間の交流促進といった一体性の醸成で、そのためにはお互



いが抱える(旧町村)の現状や課題を理解しあうことと、地域に存在する様々な資源を全体で共有することが必要であるとの認識があった。本事業の取り組みが町の地域振興・活性化に繋げるための起爆剤になることを目標に独自のプログラムを構成した。

分科会会場へ

全体のオリエンテーションを済ませ、各分科会ごとに別れてプログラムを開始。八重瀬町の主会場となる具志頭農村環境改善センターまでマイク口

バスで移動、その合間をぬって港川人や具志頭城址、ボルダリング、汗水節など、それらの地域資源に係わる逸話を含め紹介した。単に説明するよりも逸話を含めた話をすると聞き入ってもらえることを感じた。
昼食は、具志頭農村環境改善センターにおいて、ぐしちゃんいも屋お手製のカンダバー紅いもジュシー・オクラスープ・うむくじサラダ・紅いももち・ウムクジお菓子といったスローフードでもてなした。昼食後は南部の隠れたリゾートホテル、「サザンリンクスホテル」にチェックインし、本格的なプログラムのスタートである。

地域資源を訪ねる

「具志頭芋生産組合の安里夫妻」による紅いも掘りの体験の取組みを紹介し、「ヘリオスブルワリー&レストラン」においては地ビールの生産工程や試飲をしながらの商品の説明、「Kファクトリー」では木工・陶芸作品を見学しながら取組みを紹介、八重瀬町唯一の



泡盛酒造所「神谷酒造」においては、泡盛の蒸留前の試飲や生産工程を詳しく説明してもらった。その後は、車中から八重瀬公園や富盛の石掘り大獅子、謝花昇銅像、世名城のガジユマルを紹介し、十八時に改善センターに到着した。

「その時歴史が動いた 八重瀬町編」

少しの休憩を挟み、プロジェクトを活用して八重瀬町を紹介した後、沖縄地域づくりネットワークアドバイザー天願亮さんを講師にワークショップが始まった。

天願さんの講話の後、「その時歴史が動いた。八重瀬町編」をテーマに、八重瀬町の地域資源を活用した成功ストーリーを



参加者に提案してもらった。講話の中での話から八重瀬町の地域資源をPRする上で一番大事に思えたのは、質の良い本物の商品であれば宣伝によっては世界に通ずるものになるということであった。大企業などが大量に生産する工業に近いビールなどではなく、農業に近く、少量でも世界に通ずるワイン的なものの開発が八重瀬町には必要。

地産地消で交流会

その後の夕食を兼ねた交流会では、ドラゴンフ



ルーツそばやピーマン寿司、まぐろの兜焼き、紅いも関連食材など地産地消をテーマにした料理を地域資源として紹介した。また特別ゲストとして「大城友弥」ミニコンサートを催し交流会に華を添えた。初日の最後は夜なべ談議の名目で2次会に流れ、天願亮さんの三線ライブで大いに盛り上がり初日を終了した。

交流事業から得たもの
サブタイトルに再発見！「やえせの宝」すべて見せませ地域資源！と明記したが、合併して間もない状況下において八重瀬町のすべての地域資源・人材を把握することはできず、プログラムにおいても時間的な問題から深く議論するまでには至ら

なかつた。しかし、地域・年齢・業種も様々なプログラム参加者からの提案やプログラムの実施に関わった連絡調整会議の二十五名との繋がりや想いなど、今回の取り組みで得たものは多大であった。これらを今後の取組みに十分に活かしたいものである。

(八重瀬町役場
企画財政課
上地良則)

編集担当より
「なんぶ再発見！地域づくり研修交流会」は十一月十一日・十二日の二日間に渡って開催されました。報告にあるように、南風原町は「親子でカボッチャマンに会いに行こう」、南城市と与那原町は「神々と琉球王朝のロマンをたずねて」、そして八重瀬町は「地域資源の活用と展望を探る」というテーマをかかげ、それぞれの分科会に分かれて独自のプログラムで取り組みました。今回は八重瀬町が担当した第三分科会の一日目について抜粋して掲載しています。他の分科会についてはいずれ紹介できればいいなあと思っています。なお、抜粋の文責は編集担当にあります。



アドバイザーコラム 沖縄こどもの国物語 屋比久 功

思い出の場所

沖縄こどもの国は県民には親しみ深い懐かしい場所だ。遠足や行楽などで来園し、多くのこどもたちやファミリーが沖縄こどもの国で楽しい思い出を育んできた。こどもの頃に一緒に遊んだ思い出は家族や友達との絆を深め、生涯忘れがたく、生きていく元気の素になる。沖縄こどもの国はそのような尊い役割の一翼を担ってきたのである。実にここには沢山の汗と涙がしみ込んでいる。押し寄せ

で生き延びてきたのは、様々な人々の苦勞に支えられてきたからである。三十有余年の年月の積み重ねは尊い。ささやかながら私は、沖縄市職員として十年近く沖縄こどもの国に関わってきた。
今回、山あり谷ありのドラマチックな起伏に富んだ沖縄こどもの国物語の一端を紹介してみたい。
【歴史の始まり】
一九七二年に沖縄こどもの国は産声をあげた。開園までの道のりは決して平坦ではなかったが、構想が実現するに至ったのは当時、南方同胞援護会(現沖縄協会)会長であった大浜信泉氏と、コザ市長であった大山朝常氏の尽力によるところが大きい。大浜会長は戦後劣悪な環境にあった沖縄のこどもたちに日本復帰の記念として贈り物をし



たいとの熱い想いから、募金活動を全国的に展開するなど精力的に運動を牽引し、沖縄こどもの国建設資金造成のため東奔西走したのだった。また、大山市長は戦後を象徴する街コザ市のこどもたちの教育に心を注ぎ、意欲的に誘致活動を進めた。人材の育成を重要視する両氏の並々ならぬ熱意と献身的努力によって沖縄こどもの国は誕生したのである。
【発展から危機へ】
コザ市助役を辞して園長となった玉山憲栄氏の陣頭指揮により、沖縄こどもの国は名実共に沖縄を代表する動物園として発展の途を辿った。三年目で入園者がほぼ二十万人となり、九年目あたり

からは三十万人前後をキープする安定期に入る。動物を着実に増やし、日本宝くじ協会等から各種助成金を頂きながら園内整備を行う地道な努力が実を結んでいく。そして二十年目、大きなターニングポイントがやってくる。遊園地施設アイランドパークの参入である。民間企業と財団法人との並存体制のもと、アミューズメント施設は評判を呼び、飛躍的に入園者が増加、遊園地オープン初年度は五十万人を突破した。しかしながら、翌年以降から入園者数は下降線を辿り、アイランドパーク側との折り合いがつかないまま裁判も避けられない情勢下、施設老朽化も著しくなり、先行きの見えない危機的状況に陥っていった。
【プロジェクト始動】
沖縄こどもの国再生のため、平成九年に沖縄市は国の沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業を活用し、鳥袋芳敬氏(現助役)をリーダーにプロジェクトを立ち上げた。まずは、混乱したコンセ

プトを今一度立て直し、人材育成施設という看板を明快に掲げつつ、市民参画による構想づくりを目指し、チーム未来おきなわ(全県公募)を結成した。さらに、日本で先駆的にチルドレンズミュージアムをプロデュースする目黒美氏の協力を得て、参加体験型の博物館ワンダーミュージアム、市民参画の拠点チルドレンズセンターを新たに立ち上げ、ボランティアやチャリティーコンサートなどの動物園支援の動きも活発化する中で動物園整備を図り、人をつくり、環境をつくり、沖縄の未来をつくるを基本理念に据える「沖縄こども未来ゾーン」が日の目を見ることとなったのである。

